

『古今集』恋の部一の構造(二)

平沢竜介

まず、拙稿「『古今集』恋の部一の構造(一)」^(注1)に示した歌群とも重なるが、504から523までの歌群を示してみよう。^(注2)

(題しらず)

(読人しらず)

- 502 あはれてふことだになくは何をかは恋の乱れの束ね緒にせむ
- 503 思ふには忍ぶることぞまけにける色にはいでじと思ひしものを
- 504 わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ
- 505 浅茅生の小野の篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに
- 506 人知れぬ思ひやなぞと葦垣のまぢかけれども逢ふよしのなき
- 507 思ふとも恋ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐
- 508 いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ
- 509 伊勢の海に釣する海人の泛子なれや心ひとつを定めかねつる
- 510 伊勢の海の海人の釣り繩うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ
- 511 涙川なに水上を尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり
- 512 種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざらめやも
- 513 朝な朝な立つ川霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり
- 514 忘らるる時しなれば葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく
- 515 唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき

- 516 よひよひに枕さだめむ方もなしにかに寝し夜か夢に見えけむ
- 517 恋しきに命にかふるものならば死にはやすくぞあるべかりける
- 518 人の身も慣らはしものを逢はずしていざこころみむ恋ひや死ぬる

と

- 519 忍ぶればくるしきものを人知れず思ふてふこと誰に語らむ
 - 520 来む世にもはやなりなむ目の前のつれなき人を昔と思はむ
 - 521 つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで嘆きつるかな
 - 522 行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり
 - 523 人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだに知られざるらむ
 - 524 思ひやるさかひはるかになりやする迷ふ夢路に逢ふ人のなき
- 本稿(一)で既に指摘したが、504は「わが恋を人知るらめや」、「枕のみこそ知らば知るらめ」という表現が、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目の486「つれもなき人をやねたく」、「寝とはしのばむ」と対応し、かつ「わが恋を人知るらめや」と詠じて読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の三首目485の「我恋ふと妹知るらめや」と対応する。505は「人知るらめやいふ人なしに」が、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の三首目485の「妹知るらめや人し告げずは」と対応する。506は「まぢかけれ

ども逢ふよしのなき」が、読人しらず歌群の二首目484の「天つ空なる人を恋ふとて」と正反対の状況を詠じて対をなすとともに、「逢ふよしのなき」が、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の一首目483の「あはずはなにを玉の緒にせむ」と「逢ふ」の語を共有して対応する。507は「逢はむものなれや」と「逢ふ」を詠み込む他、「繕る」と「結ぶ」、「玉の緒」と「下紐」と類似した表現を用いて、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の一首目483と対応する。

すなわち、504から507までの歌群は、504が485、486と対応するのに対し、505が485と対応し、506が483、484と対応するのに対し、507が483のみにしか対応しないという対応関係を示している。このような関係から、486と対応する504が四首の最初に置かれ、485のみと対応する505がその次に、484とも対応する506がさらにその次、483としか対応しない507が四首の最後に配列されるといように、504から507までの歌群の配列の順序は、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首483から486までの歌群と左右対称の形で対応するように配列されたと考えられる。

*

また、504、505は485と、506、507は483と対応すると指摘したが、504、505は「人知るらめや」という表現を共有し、二首で一組を作り、ともに読人しらず歌群第一歌群冒頭四首の三首目485の「妹知るらめや」と対応し、506、507も「逢ふ」の語を共有して二首で一組をなすと同時に、いずれも読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の一首目483と「逢ふ」という語を共有して対応する。

508、509は「ゆたのたゆたに物思ふころぞ」、「心ひとつを定めかねつる」と、ともに心の安定しない状態を詠じ二首で一組を作ると同時に、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の二首目484が「夕暮は雲のはたてに物ぞ

思ふ天つ空なる人を恋ふとて」と漠然としたもの思いに囚われるという不安定な心情を詠じているのと対応する。^(注3)

510の「うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ」という表現は、長い間恋の思いに苦しんでいることを詠じており、「いつともわかぬ恋」を詠じた読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目486と対応する。

511は「涙川」の「水上」が「物思ふ時のわが身」だと詠じているが、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目との対応関係は見出せない。また、直前の510の歌とも共通性が認められない。かつ、511に続く512、513、514もそれぞれ独立性を有しており、前後の歌との共通性は認められない。とすると、510以降514までは、504から509のように二首で一対をなすことなく、それぞれ独立した歌が連続して並べられていると考えるのが妥当であろう。

512は「逢ふ」の語を詠み込んで、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の一首目483と対応すると同時に、506、507の対とも対応する。

513は「空にのみうきて思ひのある世なりけり」と漠然として不安定な恋のものを詠じて、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の二首目484と対応するとともに、不安定な恋のものを詠ずる508、509の対とも対応する。

514は「忘らるる時しなれば」と「いつともわかぬ恋」を詠じて、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目486と対応すると同時に、「葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく」と詠じて、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の三首目485の「刈菰の思ひ乱れて我恋ふ」という表現とも対応する。かつ「忘らるる時しなれば」という表現が510の「うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ」と対応し、「思ひ乱れて音をのみぞなく」が511の「涙川」と対応する。^(注4)

*

507から511までの歌群は、507の「結ふ手もたゆく」という表現に508の「大舟のゆたのたゆたに」という表現が類似していることから508が507に連続し、508の「大舟のゆたのたゆたに」と海の上に浮き沈みする舟を詠じた表現に、509の「伊勢の海に釣する海人の泛子なれや」と海上に浮かぶ浮子を表現した歌が連接する。さらに、509の「伊勢の海に釣する海人の泛子なれや」に510の「伊勢の海の海人の釣り縄」という表現が結びつき、508から510の海に関連する事柄が詠み込まれた歌に続いて、511の「涙川」と「川」を詠み込む歌が接続されるというようにして配列がなされたと考えられる。続く512から514は、512が506、507の対と、513が508、509の対と、514が510、511のそれぞれと対応することから、それぞれ対応する二首の歌の配列の順序に従って配列されたのであろう。

なお、508から510は「大舟のゆたのたゆたに」、「伊勢の海に釣する海人の泛子」、「伊勢の海の海人の釣り縄」といづれも海に関連する事柄を詠じて一つのまとまった歌群を作る。さらに、511は「涙川なに水上を」、513は「朝な朝な立つ川霧の」と「水」に関する言葉を詠み込んで、「水」を詠じた歌とすることができるが、508から510までの「海」を詠じた歌群も「水」を詠じた歌群と認めることができることから、508から511までは「水」を詠み込んだ歌群、513も「水」を詠み込んだ歌ということになり、508から511までの「水」を詠み込んだ歌群と513は「水」を詠み込んだ歌は、相互に対応関係を持つことになる。

*

515は「唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき」、516は「よひよひに枕さだめむ方もなしいか寝し夜か夢に見えけむ」とともに夕暮れ時に衣を返したり、枕を置く位置を定めたりして、夢の中で恋

しい人と逢うことを期待することを詠じて、二首で一組をなす。と同時に、515、516は、二首一組で読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の二首目484の「夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ」という表現とも対をなす。

517、518は、517が「恋しきに命にかふるものならば死にはやすくぞあるべかりける」、518が「逢はずしていざこころみむ恋ひや死ぬると」と、いずれも「恋死ぬ」ことを詠じて二首で一組となるが、これは読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の二首目483の「あはずはなにを玉の緒にせむ」という表現と対応する。また、517の「恋しきに命にかふるものならば」という表現は、「命と交換で恋しくない状態がえられることなら」という心持。それは結局、命と交換で会うことがえられるならということになる」と解釈できる。すると、517も「逢ふ」ことを詠じていることになり、517、518の対は、「恋死ぬ」ことを詠じて対をなすのみでなく、「逢ふ」ことを詠じて対をなし、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の二首目483と対応すると同時に、「逢ふ」の語を詠ずる506、507の対、および512とも対応する。すなわち、506、507の対と512それに517、518の対は、512を中心にして左右対称の対応関係を形成する。

519は恋の思いを表すという点で、502、503の「思いを表す」歌群と対応するとともに、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の三首目485の「人し告げずは」という表現と対応する。なお、502、503の「思いを表す」歌群は、495から497の「思いを表す」歌群と対応しており、「思いを表す」歌群は495から497の三首、502、503の二首、519の一首というように、一首ずつ歌を減らしながら順次配列がなされるという構成が取られていることになる。

515から519までの歌群は、515が514と「時」の語を共有して514に連続し、515と516が二首一組となることから、515の後に516が配置され、517と518の対

は512を中心に506、507の対と左右対称の対応関係を形成することから、516の後に配置され、かつ518と519が「人の身も慣らはしものを」、「忍ぶればくるしきものを」と、ともに逆接条件を表す接続助詞「ものを」の語を共有することから、517が518の前に置かれるというようにして、配列の順序が決められたのであろう。

520は「つれなき人」、521は「つれもなき人」と詠じて対をなし、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目486の「つれもなき人」という表現と対応する。521は「つれもなき人を恋ふとて」という表現が、522の「思はぬ人を思ふなりけり」という表現と類似することから、521が520の後に置かれ、さらに522が521の後に配置されたと考えられる。(念也)

*

読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首と対応する504から507の歌群のうち、504の「わが恋を人知るらめや」は522の「思はぬ人を思ふなりけり」という表現と対をなし、505の「忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」と521の「つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで嘆きつるかな」は、ともに恋の思いを声に出すことを詠じて対応し、506の「葦垣のまぢかけれども逢ふよしのなき」という表現と520の「目の前のつれなき人を昔と思はむ」という表現は、ともに恋しい人が近くににいるけれど思いが通じないことを詠じて対をなすというように、読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首と対応する504から507の歌群の冒頭三首504から506は、520から522と左右対称の関係を対応する。

また、504から507の歌群から始まった二首一組の対が520、521の対の後見られなくなること、520、521の対が読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の四首目486と対応することによって、504から始まった二首一組の対が読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首の一首目483から四首目486までの全ての歌

と対応することになることを考慮すると、504から522までが一つの大きなまとまりを持った歌群であることが想定される。よって、504から522までの歌群を読人しらず歌群第二歌群と呼ぶこととする。

読人しらず歌群第一歌群では、歌群の冒頭四首483から486と歌群の末尾504から507の四首が左右対称の形で対応したのに対し、読人しらず歌群第二歌群では歌群の冒頭三首504から506と歌群の末尾三首520から522が左右対称の対応関係を形成することになる。

*

504から521までの歌群は、504、505の対、506、507の対、508、509の対という三つの対が続く、そのうち後の二つの対、つまり506、507の対、508、509の対、それに510、511の独立した二首という三つの二首の組み合わせが、後続の独立した三首512、513、514とそれぞれ対応し、さらに515と516の対、517と518の対の二つの対が続く、一首独立した519の後に、520と521の対一つが配されるという構成となっている。つまり、二首一組の対の間に一首で独立した歌を挿入することで、二首一組の対の数が三、二、一と順次数を減らしながら配列されるという、先の「思いを表す」歌群の配列方法と同様の配列方法が取られていることになる。

また、504から521までの歌群と読人しらず歌群第一歌群の冒頭四首483、484、485、486との対応関係を見てみると、504、505の対は三首目485と、506、507の対は一首目483と、508、509の対は二首目484と、510は四首目486と、512は一首目483と、513は二首目484と、514は三首目485、四首目486と、515、516の対は二首目484と、517、518の対は一首目483と、519は三首目485と、520、521の対は四首目486と対応し、515だけを単独で見れば二首目484の他に一首目483とも対応する。

つまり、504から521までの歌群においては、二首一對の歌群が、三組、

二組、一組の順に計六組存在し、それら対は最初の三組が485、483、484と続く二組が484、483と、最後の二組が486というように、それぞれが読入しらず歌群第一歌群の冒頭四首483、484、485、486のいずれか一首と対応し、かつそれら二首一對の歌群の間に配置された一首で独立した歌も、511を除いて486、483、484、(485・486)、485というように、それぞれ483、484、485、486のいずれかと対応関係を有しているということになる。

なお、514は読入しらず歌群第一歌群の冒頭四首の後半二首485、486と対応し、515は読入しらず歌群第一歌群の冒頭四首の前半二首483、484と対応するということのように、514と515は特殊な対応関係を有していることも注目される。

*

既に本稿(一)で指摘したが、502から507までの歌群は504、505の対を中心に左右対称の構造をなし、503から507までの歌群は505を中心に左右対称の構造をなす。

504から514は、504と514が泣くことを詠じて共通し、505は「浅茅生の小野の篠原」という序詞を用いて、同じく「朝な朝な立つ川霧の」と序詞を用いる513と対応する。506と512は「逢ふよしのなき」、「逢はざらめやも」と「逢ふ」の語を共有し、507が反語を用いた三句切れの構文であるのに対し、511は疑問を用いた三句切れの構文を有して対応し、508と510は「大舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ」と「伊勢の海の海人の釣り纏うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ」という表現が、いずれも海の景物を比喻として用いて恋の思いを詠じている点で対をなすというように、504から514の歌群は509を中心に左右対称の構造をなす。

505から510は、505が「浅茅生の小野の篠原」、510が「伊勢の海の海人の釣り纏」とともに序詞を用いて共通し、506が「人知れぬ思ひやなぞ」と

509が「伊勢の海に釣する海人の泛子なれや」といづれも疑問の形を取って対をなす。さらに、507の「結ふ手もたゆく」と508の「大舟のゆたのたゆたに」という表現が対をなすというように、505から510の歌群は507、508の対を中心に左右対称の形で対応する。

506から510は、506が「人知れぬ思ひやなぞ」と、510が「くるしとのみや思ひわたらむ」とともに疑問の形を取り、507と509がいづれも「なれや」という表現を共有するというように、506から510の歌群は508を中心に左右対称の構成となる。

506から511は、506と511がそれぞれ「なぞ」、「なに」という疑問詞を用いて対をなし、507の「下紐」と510の「釣り纏」が対応し、508と509は海に浮かぶ「大舟」と「泛子」を詠じて対をなすというように、506から511の歌群は508、509の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。

506から513は、506と513が「思ひ」の語を共有し、507の「逢はむものなれや」と512の「逢はざらめやも」が対をなす。508と511は「物思ふ」の語を共有し、509と510は「伊勢の海」という表現を共有する。506から513の歌群は509、510の対を中心に左右対称の構造を取る。

507から515は、507の「下紐」と515の「唐衣ひもゆふぐれに」という表現に詠み込まれた「紐」の語が対応し、508と514はそれぞれ「大舟の」、「葦鶴の」という枕詞を用いて共通する。509の「心ひとつを定めかねつる」と513の「うきて思ひのある世なりけり」が同様の心情を表現して対応し、510が「うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ」と恋が成就しないのではないかと詠ずるのに対し、512の「恋をし恋ひば逢はざらめやも」は恋の成就という正反対の事柄を詠じて対をなす。507から515までの歌群は511を中心に左右対称の対応構造を形作る。

509から516の歌群は、509と516が「定む」の語を共有し、510と515がそれぞ

れ「釣り縄」と「紐」を詠み込んで対応し、511と514が「時」の語を共有し、512が「恋をし恋ひば」、513が「空にのみうきて思ひのある世なりけり」といづれも長い間恋する状態が続いていることを詠じて対応するというように、512、513の対を中心に左右対称の構造を形成する。

510から514の歌群は、510と514は「うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ」という表現と「忘らるる時しなれば」という表現がともに長い間恋い慕っている様を詠じて対応し、511と513は「物思ふ時のわが身なりけり」、「うきて思ひのある世なりけり」と、いづれも「なりけり」という表現で歌を締め括っている点が対応するというように、512を中心に左右対称の構造をなす。

510から516は、510が「くるしとのみや思ひわたらむ」、516が「いかに寝し夜か夢に見えけむ」といづれも疑問文である点で共通し、511と515は「時」の語を共有し、512が「種しあれば」と強意の序詞「し」と「あれば」、514が「忘らるる時しなれば」と強意の序詞「し」と「なければ」を詠じて対をなす。510から516の歌群は513を中心に左右対称の構造をなす。510と519は「くるし」、511と518が「身」の語を共有し、512と517はともに「逢ふ」ことを詠じて対応する。513と516は「朝な朝な」と「よひよひに」という表現が対をなし、514と515は「時」の語を共有して対応するというように、510から519の歌群は514、515の対を中心に左右対称の構造を形成する。

515と520は「ゆふぐれになる時は」、「來む世にもはやなりなむ」とある時の到来することを詠じて対応し、516と519は「いかに寝し夜か夢に見えけむ」、「人知れず思ふてふこと誰に語らむ」といづれも疑問文の形を取り、517と518は「逢ふ」ことを詠じて対応するというように、515から520の歌群は517、518の対を中心に左右対称の形を形成する。

517と524はともに「逢ふ」ことを詠じて共通し、518と523は「身」の語を詠じて対応し、519の「人知れず思ふ」という表現と522の「思はぬ人を思ふ」という表現が対応し、520の「つれなき人」と521の「つれもなき人」が対をなすというように、517から524までの歌群は520、521の対を中心に左右対称の構造を形作る。

520から524の歌群は、520が「目の前のつれなき人」と恋しい人がすぐ近くにいと詠ずるのに対し、524は「思ひやるさかひはるかになりやす」と思っている相手が遠くにいるように詠じて対をなし、521が「山彦のこたへするまで嘆きつるかな」と自らのため息の大きさに気付かないほど恋の思いに囚われていると詠ずるのに対し、523は「身のまどふだに知られざるらむ」とわが身が感っていることすら分らないほどの恋をしていと詠じて対をなす。520から524までは522を中心に左右対称の対応関係を示す。

*

以上述べてきた対応関係以外の対応関係を示すと以下のようになる。

504は「わが恋を人知るらめや」と詠じて、519の「人知れず思ふてふこと」という表現と対応し、泣くことを詠じて498、494、511と、「枕」を詠み込んで516と対応する。

505は「忍ぶとも」という表現が、503の「忍ぶることぞ」、519の「忍ぶれば」という表現と、「いふ人なしに」が485の「人し告げずは」、495の「いはねばこそあれ恋しきものを」、502の「あはれてふことだになくは」という表現と、「人知るらめやいふ人なしに」が、519の「人知れず思ふてふこと誰に語らむ」という表現と対応する。

506は「逢ふよしのなき」と詠じて、473の「逢坂の関のこなたに年を経るかな」、482の「逢ふことは雲居はるかに鳴る神の」、497の「逢ふよしを

なみ」といった表現と対応する。また、「人知れぬ思ひ」という表現で「思ひ」に「火」を掛けて詠み込み、477、480の「思ひ」の「火」、500の「蚊遣り火」の「火」と対応し、「葦垣のまちかけれども逢ふよしのなき」と恋しい人の近くにいることを詠じて、484の「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」と遠くの人を恋い慕う歌と対をなし、520の「目の前のつれなき人を昔と思はむ」とは、いずれも恋しい人が近くにいることを詠じて対応する。また、「葦垣の」という枕詞を用いて、514の「葦鶴の」という枕詞と対応する。

507は「下紐」を詠じて、483の「玉の緒」、502の「東ね緒」と対応する。

509は「心」を詠じて、491の「たぎつ心」、480、474の「心」と対応し、

510は「くるしとのみや思ひわたらむ」と「くるし」の語を詠み込んで、

496の「人知れず思へばくるし」の「くるし」と対応する。

511は「身」を詠み込んで500と対応し、512は「松」の語を詠み込んで、

490と対応する。

513は「世」を詠じて520と対応し、517は「恋死ぬ」ことを詠じて、483、

492、494と対応するとともに、「命」と詠じて483の「玉の緒」と対応する。

以上述べてきたことを踏まえて、502から523までの主要な関係を図示す

れば、次のようになる。

注

(1) 『国文白百合』43号(平成24年3月)

(2) 『古今集』は『新編日本古典文学全集』に拠る。

(3) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』445、446頁で、「第一首の「ゆたのたゆたにもの思ふ」点と、第二首の「心ひとつを定めかねつる」の意味が、共に動揺する忍ぶ恋の感情表現である点で、関係しあっている」と指摘する。

(4) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』446頁で、511から514までの四首を

「この四首は、この巻の他の部分と比べ、組織が未熟で、雑駁のそしりを免れ得られない」と指摘する。

(5) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』445頁で、508から510までを「海に寄す」歌群と規定する。

(6) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』447頁で、515、516の歌群を「この歌群を強いて銘名するならば、「抛るの恋」とでもすべきであろう。即ち、夕暮時には、かへすがへす恋人への思慕の情がつのり、それが夜になれば、せめて夢で会はうと、枕の置き方苦心を払ふといふ——一首呼吸させることによって、夜の恋の情感の世界を表現しやうとしてゐる」とする。

(7) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』447頁で、517、518、519の歌群について「第一首目と第二首目とは、「死」との対比において恋情を表出している点で、緊密に連繋してゐる。又、第二首と第三首においては、二句目の最後が「慣はしものを」「苦しきものを」と、「ものを」で終わっている点に、語句の形式上の相似が見出される。それで、今仮に、この歌群を「恋ひや死ぬ」と名づけて標題とし、他の歌群と識別することにしよう」と指摘する。

(8) 『日本古典文学大系 古今和歌集』

(9) 同注(7)。

(10) 松田武夫は『古今集の構造に関する研究』448、449頁で、520から523の歌群を「第一・第二首に「つれなき人」「つれもなき人」とあり、第三首目にも「思はぬ人」とある。第四首には単に「人」とあるが、第一・第二・第三首におけると等しく、「つれなき人」或ひは「思はぬ人」と解されるので、「つれなき人」への恋の四首と見てさしつかへないと思はれる。この四首の歌意を、無情な人を恋ひ慕っても甲斐がないので、死んでしまつて過去のことにした(第一首)。さうしてまた、山彦が答えるほどの大声で泣き喚く(第二首)。それは恰も、消えては流れ去る水に数を書きよりもはかない思ひで(第三首)、恋しても甲斐のない相手を恋ひ慕ふ心の迷ひが、自分にもわからない(第四首)と、一連の意味に解することもできる。つれなき人への恋に、盲目となった心理を、角度をかへつつ描き、絶望にも似たその気持ちを集合し表現したものと、見る事ができるやうである」と指摘する。

